

会 議 記 録			
会 議 の 名 称	産業建設常任委員会		会議場所 第3委員会室 担当職員 池永
日 時	平成30年10月26日(金曜日)	開 議	午後 2 時 00 分
		閉 議	午後 2 時 53 分
出席委員	◎西口、○石野、並河、藤本、木曾、明田 (欠席:奥村委員)		
出席理事者	【まちづくり推進部】竹村部長、並河事業担当部長 [桂川・道路整備課]関課長、澤田広域事業担当課長、小西広域事業係長		
出席事務局	池永主任		
傍聴者	市民1名	報道関係者0名	議員0名

会 議 の 概 要

1 4 : 0 0

1 開議 (西口委員長あいさつ)

<西口委員長>

奥村委員から欠席届が出ているので、ご承知おき願う。

[事務局主任より日程説明]

2 案件

[まちづくり推進部入室]

[まちづくり推進部長あいさつ]

1 4 : 0 6

(1) 洪水浸水想定区域図について (まちづくり推進部行政報告)

[桂川・道路整備課広域事業担当課長 資料に基づき説明]

1 4 : 1 3

[質疑]

<明田委員>

30年に1度、50年に1度というのは統計を取っていると思うが、千年に1度というのは、何を根拠にしているのか。

<桂川・道路整備課広域事業担当課長>

想定しうる最大規模降雨について、日本全国である程度気象条件が同じようなところをメッシュでくくっている。そのメッシュの中で、今までで最大の降雨があったところから計算した時間雨量が、亀岡市域でだいたい9時間300ミリという結果で出ている。その9時間で300ミリというのが、逆に計算すると、千分の1くらいの確率になると聞いている。

<明田委員>

自治会や自主防災会に、この資料の説明はしているのか。

<桂川・道路整備課広域事業担当課長>

詳しい説明はしていない。この図面をもとに今後、市の防災担当課でハザードマップを作成する予定であるため、それで周知されると考える。

<木曾委員>

9時間で300ミリの降雨を想定しているとのことであるが、桂川の上流で降ったものも積算に入っているのか。このあいだも上流部の日吉ダムでたくさん降って今までにないような放流をした経過があるが、それらも含めた想定なのか。

<桂川・道路整備課広域事業担当課長>

亀岡ではなく上流も含めた想定である。

<木曾委員>

気象庁等の記録では、今までで、9時間で最大どのくらい降っているのか。

<桂川・道路整備課広域事業担当課長>

平成25年の台風18号では、9時間で210.9ミリの雨が降った。これを確率にすると、100分の1から150分の1になるようである。

<木曾委員>

どんどん確率が上がって、想定されている300ミリに近づいているように感じる。今年京都府が策定した桂川上流圏域河川整備計画は、うまくあてはまるのか。

<桂川・道路整備課広域事業担当課長>

河川整備計画では、桂川本川が30分の1の河川整備である。今回の浸水想定は千分の1というような想定外の雨であるが、降らない雨ではない。千年に1回がいつ起きるかは分からない。そもそも浸水想定区域図が作成されたのは、我々が住んでいるところには危険な地域もあるということ認識し、雨が降った時は少しでも早く避難できるような体制づくりをしてほしいということである。千分の1と30分の1ではかなり開きがあるので、自分でも身を守ってもらうことが大事になってくる。

<木曾委員>

最近、線状降水帯で雨が継続して降り、いろいろなところで災害が起きている。これだけ雨が降ったら、どこに避難すればよいのか。ある程度こういったことはありうる話として避難場所を考える必要がある。避難場所に水がつくこともあるのではないか。今後の計画を含めて、根本的に見直していくのか。

<まちづくり推進部長>

この地図で色がついたところに避難場所が存在する。自治防災課に考え方を聞いたが、これからハザードマップを作るにあたって、地元で順次説明すると言っていた。この中に自治会事務所や避難所もあるが、避難方法などソフト的な対応や、避難所をどうやって維持するかについて、防災担当課が地元とも相談しながら検討していくとのことである。これだけ色がつくと心配であるが、これは上流から下流までの12キロにわたり、一斉に9時間で300ミリ降ったという想定でシミュレーションしたものである。停滞する低気圧がそれだけの範囲で一斉に降るとは限らないが、最大の降雨を考えたシミュレーションになっている。こういう状況もありうるが、ハードが追い付いていないのは確かであり、ハードに頼った意識ではなく、そういう状況になるとこうなるのだということを住民にも認識していただき、早めに避難していただくという趣旨で最大の降雨量を公表したものだとしている。

<木曾委員>

津波のように、昔から何十年に1回か繰り返されてきて、高い山に登れという意識があるような地域はよいが、そうではない状況の中で、避難せよといってもどこに避難したらよいのか。せめて、どこに逃げよという周知がないと難しい。特にこの頃、テレビの避難準備情報等でたくさんの人数が出るが、いったいどこに行くのか。どこの人が一番危ないのか、亀岡市として、くだいて指示せねば難しいのではないのか。自治防災課と連携し、そのあたりの見直しについてはどうか。

<まちづくり推進部長>

意見を自治防災課に伝え、災害対策本部として検討するように伝えておく。

<木曾委員>

保津川遊船の理事長に話を聞いていたら、保津峡の支川を含め、大量に倒木したものがたまっていると聞く。9時間で300ミリも降れば、いろいろなところでそのような土砂崩れが起こり、保津峡そのものが塞がれて大変なことになるのではないのか。そのようなことは想定に入っているのか。

<まちづくり推進部事業担当部長>

溪谷の倒木などの要因は考慮されていないと考える。

<まちづくり推進部長>

今朝、桂川改修促進期成同盟の要望で南丹広域振興局に行ったが、その時にも、倒木で保津峡が塞がった時のシミュレーションをしているのかという質問があった。府も、そこまではできていないため、意見を参考に対策を検討していきたいとのことであった。

<木曾委員>

過去、十津川で最大雨量の雨が降って土砂崩れが起き、木や土砂が塞いでダムのようになり、それが決壊して大きな被害が出た。それが保津峡で起こったらどうなるのか。保津峡が塞がれたら水がたまる一方であり、この浸水想定どころではなくなるのではないのか。これからはそういうことも想定し、避難する場所くらいは行政として責任を持って言えるような状況にしておかねばならないと考えるがどうか。

<まちづくり推進部長>

そのような心配も当然ある。期成同盟や特別委員会、京都府等とも話をしていきたい。今後の要望に、そのようなことを加えていくのも1つである。そのような時の避難については、防災部局とも連携を取る中で、どうしていくべきか検討していきたい。

<石野副委員長>

ハザードマップも作ると思うが、避難場所は高いところになる。我々は今いるところで水がつかないと思っているが、そこがだめならどこに逃げたらよいのか心配である。これを公表・説明したら、亀岡のまちづくりが厳しくなるのではないのか。今の避難場所ではどうにもならないのではないのか。避難場所の件を含めて、しっかりと取り組まれない。

<西口委員長>

先ほど保津川が土砂流や倒木で詰まるという話があったが、このあいだ実際に愛宕谷川であった。川をせき止めてダムになり、道の方に溢水した。現実には起こっている。上の山は民地であるが、そこの土砂が落ちて川と道をせき止めてしまった。このようなことは現実に起こりうることである。

<並河委員>

排水路が詰まっているのではないかとよく聞く。点検など整備の考えは。

<西口委員長>

詰まっているものはすぐに言わねばならない。

<木曾委員>

住宅の排水路か。

<並河委員>

それを含めてである。川でもいろいろなものが詰まって堆積する。今後は河川もしっかり整備しなければ大変である。そのような考えは。

<桂川・道路整備課広域事業担当課長>

堆積土砂については、市や期成同盟で、毎年国・府に要望している。そのことは認識して取るようにしてもらっている。小さい排水路については、危ないようであればすぐに言っていただきたい。

<西口委員長>

自治会を通して言ってもらったほうがよいと考える。

<藤本委員>

台風が強くなってきており、防災・減災の面を強化していこうという立場で、今までの100年に1度から千年に1度になったと考える。ただ、来年くるかもしれないものである。それにしても桂川の支川を含めて、100年に1度の対応自体が遅すぎる。100年に1度も対応できないのに、千年のマップを出して説明するなら、避難場所の移動等を含めて説明しないと不安になるだけである。その体制を十分に組んでいただきたい。畑野町土ヶ畑でも、避難場所は設定してあるが、避難場所に逃げる経路が川になっており逃げられない現状である。どうするのか明確にして説明せねばならない。日吉ダムで千年に1度に対応できるのか。

<桂川・道路整備課広域事業担当課長>

シミュレーションの中に日吉ダムの洪水調整は入っている。ただ、日吉ダムもキャパを超えると入った分をそのまま出すことになる。洪水調整の対応にはなっているが、それで全部おさまるわけではない。

<藤本委員>

京都新聞に、スタジアムは1～2メートル増えるだけであり大丈夫だと書かれているが、周りが湖になると避難場所にはならない。そのあたりの安全性を明確にして説明されたい。

<まちづくり推進部長>

今日ここで避難場所まで説明できればよいが、ハザードマップや避難場所の関係は、現在、防災部局で検討している。我々としては浸水想定区域図が公表されたので図面を配付し、考え方や状況を説明したものである。

<西口委員長>

担当課が委員会に説明したいと相談に来られ、私は事前に説明を受けた。京都府から現状の報告を受けている状況を、いち早く議会に説明したいということで来られているものであり、理解いただきたい。

<木曾委員>

スタジアムに防災備蓄倉庫を備えるが、防災の時に必要なものが出せなければ、何のための倉庫なのか分からない。運動公園に倉庫をもっていくことを含めて、京都府に言っておいていただきたい。

<まちづくり推進部事業担当部長>

京都市内の図に浸水の深さの凡例を掲載している。最大限の雨が降った場合、横には逃げられないため、上に逃げるという意識も必要である。避難所の備蓄品等も、他の場所へということもあるが、垂直方向への対応も今後考慮していきたい。

<木曾委員>

京都市内には5メートル以上の建物も多く、垂直避難しても助かる率が高いが、亀岡にはそんなにない。5メートルとなると普通の2階建てでは浸かってしまう。京都市内との比較は違う部分も出てくる。そのことを含めて考えていただきたい。

<まちづくり推進部事業担当部長>

本市で3～5メートルと深いところは、これまで遊水機能を果たしてきたところが多い。住居のところは、そこまで深くない部分もある。場所によって建物の状況は変わるが、意識づけのための浸水想定ということで理解いただきたい。また、雨は千年に1度の規模であるが、被害が起きる条件についても、かなり厳しく想定されている。整備済みの河川の堤防は一定余裕高があり、10年・30年確率でここまで水がくるというところにプラスし、治水上1メートルから1メートル50センチ余裕を持っている。しかし、この浸水想定は、計画している高さにきた時点で堤防が切れるという最悪のシミュレーションをしている。しかも、堤防全てが一度に切れるという想定である。雨の想定も、被害を受ける状況もかなり厳しく想定されているものである。

<木曾委員>

こういう想定が出てきて、霞堤の嵩上げをしても意味がないという議論になれば、今までの計画が水の泡になってしまう。この想定は想定として、その部分はきちんと進められたい。あわせて支川の堆積土砂をもう少し撤去しないと、そこから堤防をオーバーしてしまうと、本堤防が崩れてしまう。今できる事前の整備をすべきであり、堆積土砂を早く出すことが大事である。そのことによって被害を低減させねばならないと考えるがどうか。

<まちづくり推進部長>

今日も要望していただいたが、いろいろな場面でそのような声を聞く。我々も同じ考え方であり、一緒に取り組んでいきたい。

<並河委員>

浸水想定図は皆興味を持っている。この資料は全議員に出す予定なのか。

<桂川・道路整備課広域事業担当課長>

出すことはできる。既に一部分配付している。

<西口委員長>

全議員に配付願う。

<木曾委員>

1月には選挙もある。こういう話は大事である。

[まちづくり推進部退室]

14:51

3 その他

<西口委員長>

次回の月例は上下水道部から行政報告の申し出を受けている。日程を調整する。

[日程調整]

<西口委員長>

今回は11月12日(月)10時からとする。

散会 ～14:53